
The Android Shcool ~hyo's story~

カシスオレンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Android School ~ hyo's story

【Nコード】

N2805V

【作者名】

カシスオレンジ

【あらすじ】

未来ーーーーー今より遙か未来に、アンドロイド育成機関が建立された。そこはアンドロイドだけが通う学校。そこに、ある新型ボーカロイドが入学する。彼と仲間たちの、青春ストーリーが幕を開ける。

※更新スピードは陸に上がった亀のようなスピードですので、気長

にお待ちください。

episode 0 プロローグ（前書き）

初めましての方も、またお前かの方も、どうも、こんにちは。カシスオレンジと申します。

これはボカロの二次創作です。「こんなの俺の知ってる○○じゃねえ！」とか、「ふざけんなボカロに性格はいらねえ！」と考える方は、回れ右です。

基本的に作者の見苦しい妄想小説で、酷い文章力ですが、読んでくれる方は感想をいただけると嬉しいですm（　　）m

episode 0 プロローグ

無機質、だけど賑やかな場所だ、と氷^{ひょう}は思った。アンドロイドがそんなことを考えるのも、どうかとは思うが。

無機質なのは仕方ないだろう。ここ一帯に人間はそんなに住んでいない代わりに、この辺りはアンドロイドが大量に住んでいる。

？氷自身も、新しく作られたアンドロイドであり、この街へ送られて来た。

？「V-39地区」、通称アンドロイドシティ。非常に高度な技術により生み出されたアンドロイドの2割は、この無機質な大都市に住んでいる。残った8割は商業目的に使用されている。

？一見、この街並みは人間の住む街となんら変わらない。なぜならアンドロイドたちは人間となんら変わらないように作ってあるからだ。

？人のように食べ、人のように動き、人のように眠り、人のように育っていく。それでも人間じゃないっていうから、不思議だ。

？そして、その中でも人のように、或いは人以上に歌唱力をもった高性能アンドロイド、「歌唱用人型アンドロイド」が存在している。「歌唱用人型アンドロイド」は商品名であり、俗にはボーカロイドと呼ばれる。

？この街にはアンドロイド育成機関が、世界にたった一つだけ存在している。生徒も先生も全てアンドロイド。機械が機械に物事を教

える様は、はたから見れば気色悪いことこの上ないだろう。

？歩くのをやめた氷は、自らを待ち受ける学校を見上げた。学校というよりかは、大企業の本社ビルに見えなくもない。

「君、新入りか？」

？横から声をかけられ、そっちを氷は見る。10台後半から20台前半に見える男が校門の柱に寄りかかっている。

「まあな。アンタは？」

「僕はファートルという。この学校の……教師のような者だ」

？『のような者』という言葉が気になったが、敢えてそこには首を突っ込まなかった。この男にも、言いたくない事情があるのだろう。

「そうか……。なら入学届を提出するのはアンタでもいいか？」

「生憎、僕はその係りじゃなくてね。職員室に行ってくれ。テト、という先生がその係りだ」

？会釈をして、氷は門をくぐる。

「君、縁があったらまた会おう」

？後ろからする声に応じる代わり、氷は右手を上げた。ギターを背負って歩くその姿は、どこかのミュージシャンのように見えた。

？校舎の中も、外見の立派さに恥ない作りだった。近未来な作りをしているこの校舎は、創立20年を迎えたはずだが、廃れた感じはしなかった。

「つと……ここか」

？職員室と、浮いたモニターに映っている。

？敢えて自動ドアではないのは、生徒が突然入って来ないように、との考えだろう。ノックをして、ドアを開けると、教員が一斉にこっちを向く。

「テト先生はいらっしゃいますか？」

「ああ、ボクがテトだよ。何の用かな？」

？赤い、ドリルのようなツインテールをした人、いやアンドロイドが、ドアの方に歩いて来た。

「入学届を提出しに来ました」

？入学届をテトに渡すと、テトはそれを見始める。

「涼音^{すずね} 氷くん……か。ボーカロイドかな？」

「はい」

「よし！30分後に新入生説明会があるから、体育館に行ってくる？あ、これに名前とナンバーを書いて服に付けてね」

？テトから差し出されたのは名札のような物だ。名前欄とナンバー欄がそれぞれある。ナンバーとは、製造番号のことだろう。

？氷はボールペンを取り出して名前欄に涼音氷、ナンバー欄に37201と書いた。

「体育館の場所は分かる？」

「はい、それじゃこれで」

？氷は頭を下げて、足早にその場を去った。生徒としては、やはり職員室は心地よい場所ではないのだろう。

？体育館には、そんなに人は多くなかった。なぜなら、アンドロイド学校は一部のアンドロイドしか送られてこない。と言うのも、殆どのアンドロイドは売買されたり、サービス業に使われている。つまり、教育を受けさせるほど長持ちしない、安価なアンドロイドたちだ。

？一方、世界に一体しか製造されない、などと言った手の凝ったアンドロイドは必ずと言っていいほどの学校に送られる。高価な物は教育を受けさせて自由にすべき、ということだ。

？一定基準を上回った高性能アンドロイドはあまりにも人間らしすぎた為、国籍、人権、参政権などが与えられた。そういったアンドロイドも、この学校に送られてくるが、ごく僅かだ。

？あまり体育館内の人数は多くないとは言っても、話し声は絶えない。世間話をしているアンドロイドのいれば、意気投合して肩を組み合っているアンドロイドもいた。

？氷はまるで興味がなかったかのように、腕を組んで壁にもたれかかって目を瞑っていた。

「こんにちは、あなたなんていう名前？」

？氷は目を瞑ったままだった。自分に向かって発せられた言葉だとは思わなかったからだ。

？何気なく目を開けてみると、足元まで届くほど長い、翠のツインテールをした美少女がにこやかに笑いながら立っていた。

「ね、なんていう名前？」

「……涼音 氷だ」

？氷は素っ気なく答えた。あまりにも冷たい対応に、少女は苦笑いした。

「私、初音ミクっていうの。よろしく」

？氷はそれには答えず、再び目を瞑った。それから、小さく頷いた。

？ミクはこれ以上話しかけても無駄と悟ったか、またね、と声をかけて去っていった。氷は見向きもせず、ただ立っているだけだった。

episode 1 荒ぶるクラス（前書き）

懲りずに第一話。読み返すと……なんてグダグダなんだこの小説。

余談ですが、起きたら目が真っ赤に腫れ上がってました。早く治らないかな……。

episode 1 荒ぶるクラス

説明会では、大した説明は行われなかった。そもそも、配布される生徒手帳に載っているようなことを説明する必要もないだろう。生徒たちも、寝だす者が続出した。

その後、60人程度の生徒たちは、ボーカロイド、戦闘用アンドロイド、サポート用アンドロイドに分けられた。ボーカロイドは14人しか残らなかった。

？そしてその中には、様々な年齢のアンドロイドがいたことが、氷にとっては面白かった。

いや、実際の年齢なら、全員同じ年齢だろう。ただ、見た目の問題、ということだ。製造された年は同じでも、何歳のアンドロイドかという設定が異なっている。

「ヨーシ、席につけー」

やけに片言喋りをする、妙に日焼けした人物が教室に入ってくる。そして何故か竹刀を持っていた。

「オレが、お前らのセンサーのレオンだ。ヨロシク！」

自己紹介もやはり片言しゃべり。外国製アンドロイドだ、と氷は思った。世界に一つだけの学校なら、外国製があってもおかしくもなんともない。

「ジャア、お前らにジコシヨーカイしてもらおうか」

？竹刀の先端を肩に乗つけて、少ない席の間を歩き回る。そしてあるボーカロイドの前で立ち止まった。

「ヨシ！そのBLUEな髪したボーイ。君からだ」

「お、俺？」

？情けなさそうな大人の青年、いや見た目は氷より年上のボーカロイドが立ち上がった。

「俺はカイトと言う名前だ。好きな物はアイス、よく使う物は正露丸。宜しく」

？正露丸と聞いて、一同は嘖き出す。カイトはやったと言わんばかりにニヤつく。そして、彼の隣の席の、赤い服をきた女のボーカロイドを見て、「やったぜめーちゃん」と言ってもう一度ニヤツと笑った。めーちゃんと呼ばれた人物は、名札にメイコと書いたあつたので、めーちゃんは愛称なのだろう。

「OK！ジャー次ね！その、黒髪ボーイ！」

？レオンが指さしたのは氷だった。氷は無表情のまま立ち上がる。

「涼音氷だ。以上」

？非常に簡潔な自己紹介をした氷は、そのまま座った。クラスは一瞬シンとする。それからコソコソと小さな声で氷への文句が聞こえる。どこまでも冷たい態度の氷は、クラスの空気を読むつもりは更々ないようだった。

「何あいつ……感じ悪……」

「陰キャラね、きつと」

？声はだんだんはつきりしてきたが、氷は目を瞑って椅子の背のもたれかかっている。まるで興味がないように見えた。

「せ、先生！次私が自己紹介します！」

？そう言って手を上げたのは、体育館で氷に話しかけていた少女――
「ミクだった。」

？氷が壊したクラスの雰囲気や和らげようとしたのだろう。

「オオー、元気イイですネー。ジャー頼もうか」

「私、初音ミクっていいいます！得意な楽器はギターです。好きな食べ物……ネギです」

？好きな食べ物がネギ？と妙にクラスでコソコソ話が聞こえた。ミクは顔を赤くして黙って座り込む。

？その横で、氷は小さく鼻で笑った。彼にしては珍しかった。

「ネギかー。変わったシュミダナー」

「あう……やっぱり変わった趣味なんだ……」

？レオンの追撃を受けたミクは茹で蛸のように顔を赤くした。やは

り自分の趣味が変わった趣味だとは自覚しているようだった。ネギが好物のアンドロイドなんて古今東西聞いたことがない。

「ヨシ！自己紹介は3人ぐらいでいいか！」

「はい……ってええ！？」

？金髪の少年がわざとらしく驚く。それにしても、このレオンという人物は良く言えば気分屋、悪く言えば自分勝手な人物のようだ。

「ン？自己紹介したいノカ？」

「いえ、そういう訳ではないんですが……」

「ジャーヤラナクテもいいだろ？」

「レン、諦めなよ」

「いや、リン……でもさ……」

？言いかけて、金髪の少年、レンは黙ってしまう。ある意味、レオンの独裁である。レンと同じく金髪の少女、リンは説得不可能と判断したのだろう。

「OK！次は寮のグループを決めようジャンイカ！」

？レオンは意味もなく竹刀で黒板をたたく。時代錯誤の熱血教師のモノマネに見えなくもない。

「寮の……グループ？」

「ソウ！2つのグループに分け、それで住む寮も違う訳だ！1つのグループは8人ダゼ！」

「先生、14人しかいないから7人じゃないですか？」

「ノーノー、あと2人、明日クルよ」

？今日は何らかの用事があったのだろう。このクラスの人数は16人ということなら、8人というのは納得が行く。

「じゃ、自由に決めてクレ」

？レオンはそういうと、椅子に座って英語の本を読み始める。相当、適当に物事を済ませようとする人物のようだ。

？生徒たちは立ち上がり、い話し合いを始める。

「ねえ、氷くん」

？名前を呼ばれて、その声がした方を氷は横目で見る。またしてもミクが自分に話しかけてきていたのだ。

「……何の用だ」

「一緒に、さ。寮住まない？7人確定してるんだ」

？氷がクラスを見回すと、8人が集まっているところとカイト、メイコ、リン、レンが一箇所に集まっているところがあった。ということは、あの4人の所がミクの入っているグループであり、残りの

明日くる予定の2人と氷を引き取るということだろう。

？仕方なしに、氷は小さく頷いた。

「ホント？ありがとう！」

？ミクは氷に笑いかけてきたが、氷は何の反応もせずにとただ、窓の外だけを見つめていた。

『班長？』

？氷とメイコ以外の4人が声を揃えた。あの後、二つのグループはそのままそれぞれの寮に向かった。

「そ、あの親父教師から聞いたんだけど、グループでは班長を決めなきゃいけないの」

？何でグループ長じゃないんだろうね、とメイコは笑った。因みに親父教師とは当然レオンのことである。

「明日までに決めなきゃいけないから、今決めちゃおうか。私でいい？」

「もうそのつもりじゃん、メイコ姉」

「何の為に聞いたのさ」

？リンとレンが揃ってメイコにツツコミをかける。しかし、異論はないようである。

「私は別にいいよ」

「まあ、この中で一番統率力ありそうなのはめーちゃんだしね」

？ミクとカイトも何の異論もないようで、メイコはにっこり微笑む。

「ね、氷くんもいい？」

「……いいんじゃないか」

？部屋の隅に座りこみ、長編小説と思われる800ページはあろう分厚い本を読む氷に、ミクは同意を求める。氷が孤立してるようにも見えないが、ミク以外の5人もさっきから積極的に氷に話しかけていた。結局、いつもの冷たい態度に撤退するしかなかったのだが。

「さっきからずっと本読んでるけど、面白いかな？」

「別に……。ただ、何らかの形で知らない情報を蓄えておくことに損はないからだ」

？質問をしたカイトは予想外の回答に苦笑いした。氷には感性という物がないように思える。

「アンタ……その性格は会社の仕様？」

？呆れた表情でメイコが問う。

「仕様かどうかは知らないが……俺にインプットされている感情データとそれに関連するプログラムは必要最低限しかない」

？淀みなく、声の抑揚すら変えずに答えるあたり、これは事実と考えられる。

「なら……おかしいわ」

「お姉ちゃん、どういうこと？」

？眉間に皺を寄せてメイコは考え込む。何がおかしいかはミク達にはさっぱり分からなかった。

「ええ……感情データが少ないアンドロイドは基本的には学園には送られて来ないのよ。そういうアンドロイドは商業目的に使われるのが殆ど。だから、会社側の意図が分からないの」

？なるほど、メイコのいうことは一理ある。アンドロイドに感情が芽生える、なんてことは滅多にはない。そもそも感情がないアンドロイドはいいなりになるから扱いやすいから安値で販売されるので、いちいち感情を付け加える必要もないのだ。

？それなのに、氷のようなアンドロイドが学園に送られるのはおかしい。高性能のアンドロイドに感情をつけるのは、基本中の基本だ。

「まあ、いいんじゃないか？氷にそんなことを言っても始まらない。今が楽しければ、それでいいだろ」

「お、カイト兄が珍しくまともなことを言った」

「ちょ、レン！？俺の超かつこいい発言を揶揄するなよ！？」

？慌てふためくカイト。レンは笑いながらリンに同意を求め、リンもそれに答えていた。

？こいつらなら、俺にもまともな感情と呼ばれる物が芽生えるかもしれない。氷は少しだけ、そんな期待をした。

episode 1 荒ぶるクラス（後書き）

10話まで進んだらネタ短編を出します（笑）

お題は……お楽しみに（笑）

※途中で訳の分からない「yug」という暗号が出てきたので修正しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2805v/>

The Android Shcool ~hyo's story~

2011年10月9日19時08分発行